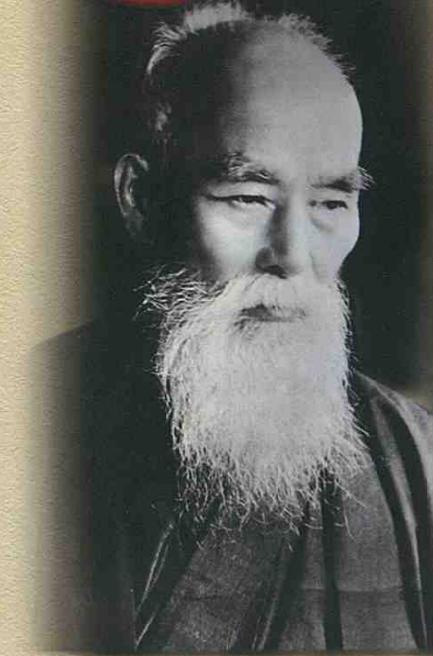


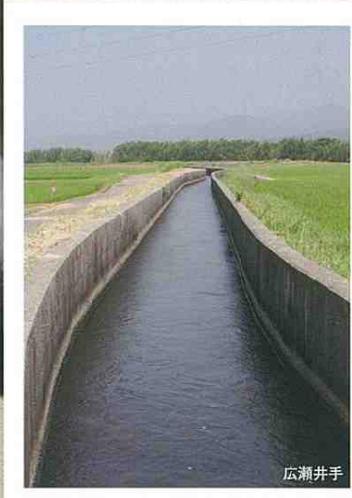
南一郎平

みなみ いちろべい

水路づくりに生涯を捧げた疎水事業の父



1836年(天保7年)～1919年(大正8年)
没年83歳



広瀬井手

南一郎平の「座右の銘」

いちにちがく
「一日学」 今日一日だけはと努力し続けると、一生つづけて学ぶことが出来ること。

じきょうふそく
「自疆不息」 休み無く努力し、自己を強化すること。

南一郎平の人となり—

一郎平の住んでいた所は、川より20メートル以上高い台地で、畠地としてしか利用されませんでした。

「米を作り地域を豊かにするように」との父の遺言から、米を作るにはまず水を引くことと、水利事業に取り組むことになりました。

土木工事には素人だった一郎平ですが、熱心に取り組み、これまで誰も不可能だった広瀬井手を完成させました。座右の言葉「一日学」と、毎日今日一日だけはと努力して、それを「自疆不息」と、たゆまずに努力した一生でした。

広瀬井手完成以後は、安積、那須、琵琶湖と明治の三大疎水といわれる工事に関わり、疎水事業の父と言ってもよい活躍をしています。のちに広瀬井手完成を感謝した地元の人々からのお米の提供を断るなど、人々を豊かにすることに生涯を捧げた人でした。

	年号	元号	年齢	生涯業績
一八三六年	天保七年			
一八五二年	嘉永五年	16	0	宇佐市金屋にて生まれる
一八五六六年	安政三年	20		賀来志津と結婚(賀来惟熊の長女)
一八六一年	文久元年	25		父死去(広瀬井手工事再興と完成を一郎平に遺言)
一九一九年	大正八年			(第四回目の起業)
一八八六年	文久二年	26		広瀬井手工事再興を決意し、同志にはかる
一八八九年	元治元年	28		(第四回目の起業)
一八六六年	慶応元年	29		広瀬井手第五回目の起業
一八七〇年	慶応四年	30		「井手切手」の両替困難により、公金借用
一八七三年	明治六年	32		「井手切手」発行を請願
一八七四年	明治七年	33		着手することなく断念
一八七五年	明治八年	34		公金の返済が出来ず入牢するも御許騒動で助かる
一八七八年	明治二年	35		松方正義日田県知事、水路の巡察を行なう
一八八一年	明治四年	36		通水式が行なわれ、国からの援助が終了。残工事一切は
一八八二年	明治五年	37		一郎平の単独事業となる
一八八三年	明治六年	38		松方正義候の招きにより上京、内務省農務課に勤務する
一八八四年	明治七年	39		全国に水利開墾事業を興すため適地調査に各地へ派遣される
一八八五年	明治八年	40		安積疎水工事着工準備担当として現地で指揮する
一八八六年	明治二年	41		北垣国道京都府知事より、琵琶湖疎水計画の実地調査を依頼される
一八八七年	明治四年	42		琵琶湖疎水の詳細な「意見書」並びに「水利目論見書」を提出
一八八八年	明治五年	43		那須疎水開削のため測量実施
一八八九年	明治六年	44		退官し「現業社」を興す
一八九〇年	明治七年	45		一郎平を「尚」と改名
一八九一年	明治八年	46		
一八九二年	明治九年	47		
一八九三年	明治十年	48		
一八九四年	明治十一年	49		
一八九五年	明治十二年	50		
一八九六年	明治十三年	51		
一八九七年	明治十四年	52		
一八九八年	明治十五年	53		
一八九九年	明治十六年	54		
一九〇〇年	明治十七年	55		
一九〇一年	明治十八年	56		
一九〇二年	明治十九年	57		
一九〇三年	明治二十年	58		
一九〇四年	明治二十一年	59		
一九〇五年	明治二十二年	60		
一九〇六年	明治二十三年	61		
一九〇七年	明治二十四年	62		
一九〇八年	明治二十五年	63		
一九〇九年	明治二十六年	64		
一九一〇年	明治二十七年	65		
一九一一年	明治二十八年	66		
一九一二年	明治二十九年	67		
一九一三年	明治三十一年	68		
一九一四年	明治三十二年	69		
一九一五年	明治三十三年	70		
一九一六年	明治三四年	71		
一九一七年	明治三五年	72		
一九一八年	明治三六年	73		
一九一九年	明治三七年	74		
一九二〇年	明治三八年	75		
一九二一年	明治三九年	76		
一九二二年	明治四十一年	77		
一九二三年	明治四十二年	78		
一九二四年	明治四十三年	79		
一九二五年	明治四十四年	80		
一九二六年	明治四十五年	81		
一九二七年	明治四十六年	82		
一九二八年	明治四七年	83		
一九二九年	明治四八年	84		
一九三〇年	明治四九年	85		
一九三一年	明治五十一年	86		
一九三二年	明治五十二年	87		
一九三三年	明治五十三年	88		
一九三四年	明治五四年	89		
一九三五年	明治五五年	90		
一九三六年	明治五六年	91		
一九三七年	明治五七年	92		
一九三八年	明治五八年	93		
一九三九年	明治五九年	94		
一九四〇年	明治六十一年	95		
一九四一年	昭和元年	96		
一九四二年	昭和二年	97		
一九四三年	昭和三年	98		
一九四四年	昭和四年	99		
一九四五年	昭和五年	100		
一九四六年	昭和六年	101		
一九四七年	昭和七年	102		
一九四八年	昭和八年	103		
一九四九年	昭和九年	104		
一九五〇年	昭和十年	105		
一九五一年	昭和十一年	106		
一九五二年	昭和十二年	107		
一九五三年	昭和十三年	108		
一九五四年	昭和十四年	109		
一九五五年	昭和十五年	110		
一九五六年	昭和十六年	111		
一九五七年	昭和十七年	112		
一九五八年	昭和十八年	113		
一九五九年	昭和十九年	114		
一九六〇年	昭和二十年	115		
一九六一年	昭和二十一年	116		
一九六二年	昭和二十二年	117		
一九六三年	昭和二十三年	118		
一九六四年	昭和二十四年	119		
一九六五年	昭和二十五年	120		
一九六六年	昭和二十六年	121		
一九六七年	昭和二十七年	122		
一九六八年	昭和二十八年	123		
一九六九年	昭和二十九年	124		
一九七〇年	昭和三十年	125		
一九七一年	昭和三十一年	126		
一九七二年	昭和三十二年	127		
一九七三年	昭和三十三年	128		
一九七四年	昭和三四年	129		
一九七五年	昭和三五年	130		
一九七六年	昭和三六年	131		
一九七七年	昭和三七年	132		
一九七八年	昭和三八年	133		
一九七九年	昭和三九年	134		
一九八〇年	昭和四十一年	135		
一九八一年	昭和四十二年	136		
一九八二年	昭和四十三年	137		
一九八三年	昭和四四年	138		
一九八四年	昭和四五年	139		
一九八五年	昭和四六年	140		
一九八六年	昭和四七年	141		
一九八七年	昭和四八年	142		
一九八八年	昭和四九年	143		
一九八九年	昭和五十一年	144		
一九九〇年	昭和五十二年	145		
一九九一年	昭和五十三年	146		
一九九二年	昭和五四年	147		
一九九三年	昭和五五年	148		
一九九四年	昭和五六年	149		
一九九五年	昭和五七年	150		
一九九六年	昭和五八年	151		
一九九七年	昭和五九年	152		
一九九八年	昭和六十一年	153		
一九九九年	昭和六十二年	154		
二〇〇〇年	昭和六十三年	155		
二〇〇一年	昭和六四年	156		
二〇〇二年	昭和六五年	157		
二〇〇三年	昭和六六年	158		
二〇〇四年	昭和六七年	159		
二〇〇五年	昭和六八年	160		
二〇〇六年	昭和六九年	161		
二〇〇七年	昭和七十一年	162		
二〇〇八年	昭和七二年	163		
二〇〇九年	昭和七三年	164		
二〇一〇年	昭和七四年	165		
二〇一一年	昭和七五年	166		
二〇一二年	昭和七六年	167		
二〇一三年	昭和七七年	168		
二〇一四年	昭和七八年	169		
二〇一五年	昭和七九年	170		
二〇一六年	昭和八十一年	171		
二〇一七年	昭和八二年	172		
二〇一八年	昭和八三年	173		
二〇一九年	昭和八四年	174		
二〇二〇年	昭和八五年	175		
二〇二一年	昭和八六年	176		
二〇二二年	昭和八七年	177		
二〇二三年	昭和八八年	178		
二〇二四年	昭和八九年	179		
二〇二五年	昭和九〇年	180		
二〇二六年	昭和九一年	181		
二〇二七年	昭和九二年	182		
二〇二八年	昭和九三年	183		
二〇二九年	昭和九四年	184		
二〇三〇年	昭和九五年	185		
二〇三一年	昭和九六年	186		
二〇三二年	昭和九七年	187		
二〇三三年	昭和九八年	188		
二〇三四年	昭和九九年	189		
二〇三五年	昭和二〇〇〇年	190		
二〇三六年	昭和二〇〇一年	191		
二〇三七年	昭和二　〇二年	192		
二〇三八年	昭和二　〇三年	193		
二〇三九年	昭和二　〇四年	194		
二〇四〇年	昭和二　〇五年	195		
二〇四一年	昭和二　〇六年	196		
二〇四二年	昭和二　〇七年	197		
二〇四三年	昭和二　〇八年	198		
二〇四四年	昭和二　〇九年	199		
二〇四五年	昭和二　〇〇〇〇年	200		

ひろ せ い で 廣瀬井手 1751年(宝曆元年)～1873年(明治6年) 一郎平 産まれる85年前～37歳



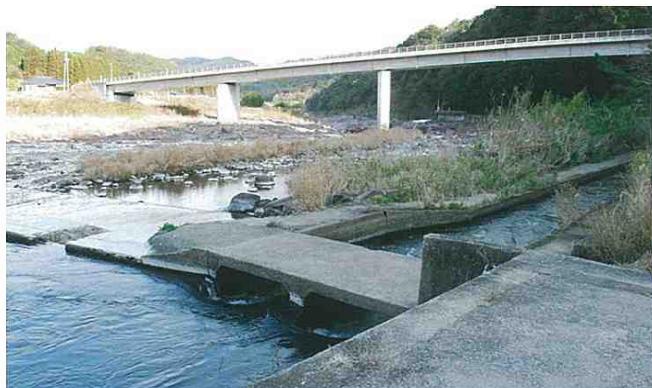
広瀬井手は、宇佐市院内町広瀬の取水口からはじまります。

総延長17キロ。谷を越え、山をうがち、数多くの難所を経て流れています。四度の工事中断の末、明治6年に約120年という歳月をかけて完成しました。

この水路の完成により、水不足で稲や稗などしかできなかつた瘦せた駅館川東岸の台地は肥沃な水田地帯に変わったのです。

広瀬井手は今でもほぼ同じ所を流れ、稻作に必要な水を供給し続けています。これから先も同じように、多くの水田を潤す水路であり続けることでしょう。

*井手…河川から田んぼに水を引くための水路



1 取水口

津房川東岸につくられた取水口です
(宇佐市院内町広瀬)



2 水路(宅畠)

宇佐市長洲まで総延長17km
高低差約40mです



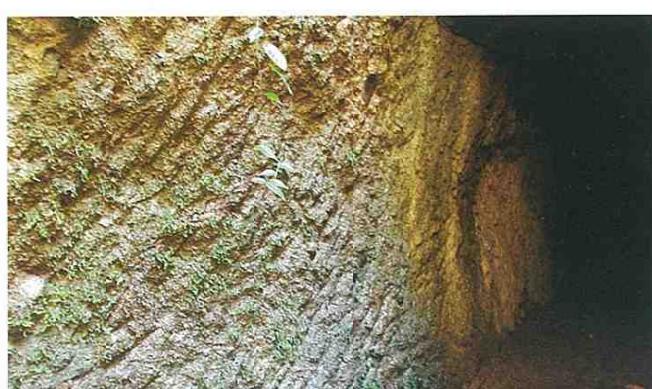
3 藤ヶ谷水路橋

石工・児島組の技術が活かされています



4 隧道(間風)

足場の悪い藤ヶ谷を迂回するためにつくられたトンネルです



5 藤ヶ谷の隧道の内部

トンネル内部には鑿の跡が残っています





6 百重岩

岩盤が固く、難所だったところです



7 地獄谷

完成当時はサイフォン式で造られていましたが、現在は、国道10号を越える水路橋になっています



8 サイフォン

一度下げた水を水圧を利用してまた上げる方法で流しています
サイフォンの原理を応用しています

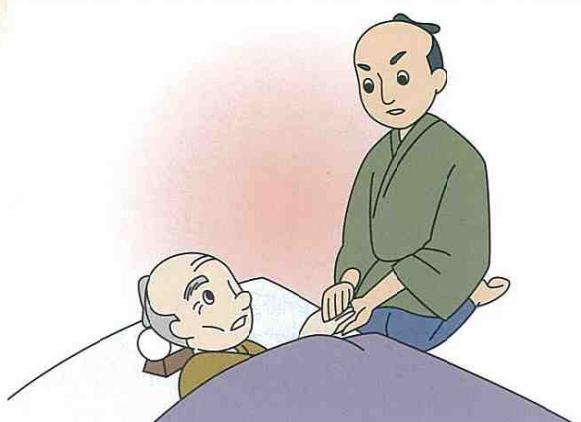


9 南尚神社

昭和35年に建立された神社
120年かかって水路が完成したことを記す碑があります

エピソード I

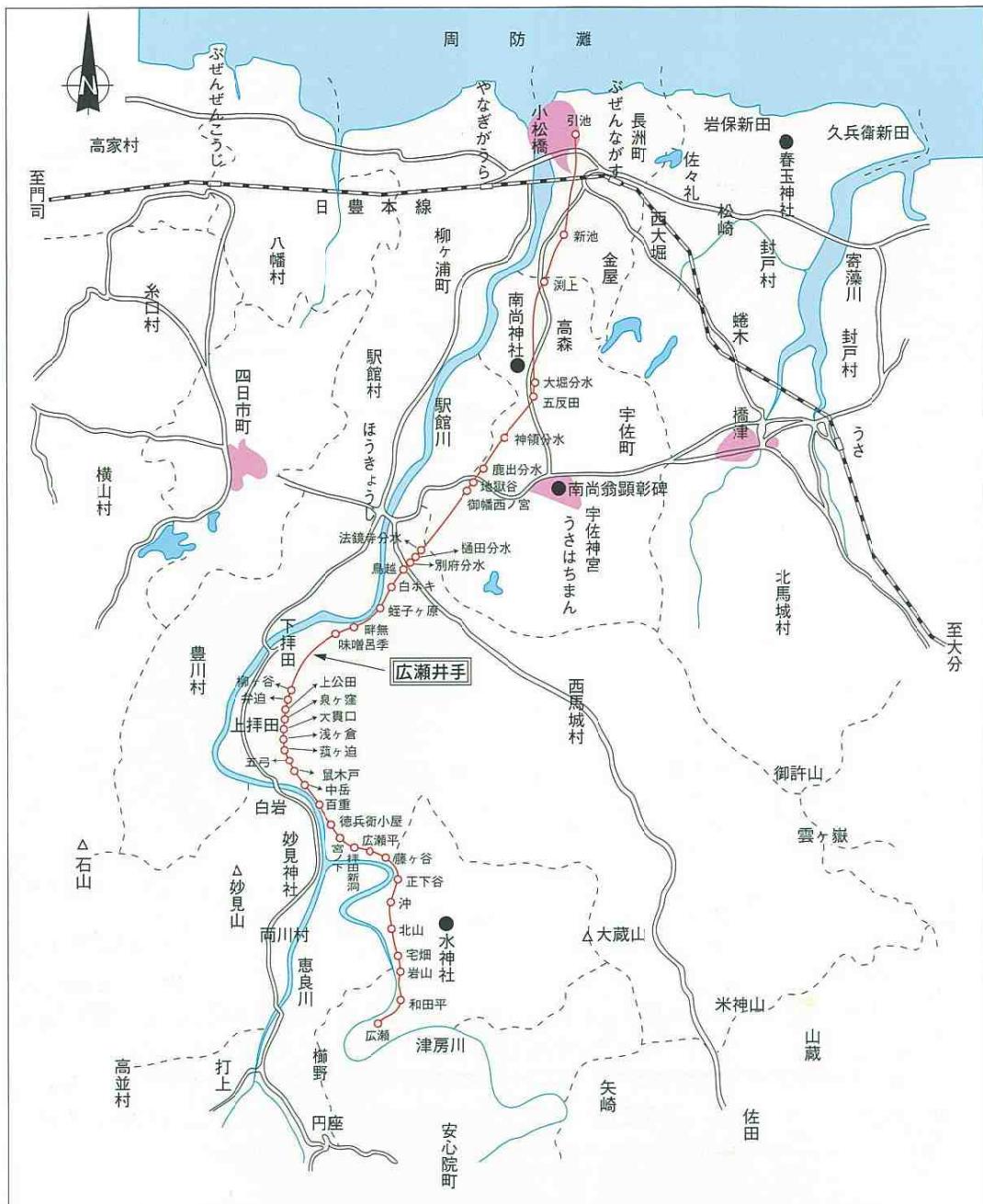
父の遺言で事業に着手



金屋村の庄屋であった父・宗保は、西国筋
ぐんだい むちやす きいこくすじ
郡代(日田代官)塩谷大四郎の広瀬井手事業
しょのやだいしじょう ぶんせいやう
に協力しました。そして、一人息子の一郎平
に井手事業の重要性を説いて育てました。

父の死から五年後の文久元年(1861年)、
一郎平26歳の時に父の遺言であった工事
再開を決意し、村人など多くの人々に協力を
依頼しました。みんなは若い青年の信念
と情熱にうたれ、協力することを約束しま
した。この人たちは最後まで自分の利益は
考えずに多くの苦難に耐え、一郎平を助け
ました。

廣瀬井手略図



※この略図は『宇佐市史(中巻)』を改変したものです。

エピソード

II

難工事

廣瀬井手の工事は難所が多くとても苦労をしました。一郎平が工事に着工するまでに過去三度の工事が行なわれましたが、土質が軟質なところは崩落し岩盤は迂回するように樋をかけましたが崩れるなどしたため工事が中止されました。一郎平が着工するようになっても軟質な土質と硬い岩盤に悩まされました。なかでも、非常に硬い岩盤のため一番の難所であった百重岩は薪や油で岩盤を熱してひびをいれ、鑿で少しづつ削っていくという工法を使い、縦一尺五寸(45cm)、横一尺二寸(36cm)、長さ五百間(900m)のトンネルを八年もの歳月をかけ完成させました。

エピソード

III

総事業費と借金

広瀬井手の総事業費は三万六千両とされています。これを現在のお金に換算すると九億円以上になります。この事業費の多くを日田の豪商・広瀬久兵衛から借用しました。久兵衛からは失敗した時は返さなくとも良いという好条件で三千両を借りましたが、難工事のためさらに借金を重ね一万両以上を借りました。一郎平は同時に公金も数千両借りており、全部で二万両になったとされています。一郎平は公金の返済ができずに二度も入牢しています。昭和44年から52年にかけて行なわれた大改修工事では当時の金額で約十二億五千五百万円が使われており、のことからも広瀬井手の総事業費とそのために一郎平が背負った借金の大さが伺えます。



エピソード

IV

松方正義と南一郎平



松方正義

明治2年、広瀬久兵衛からのお金などを使い果たした一郎平らは、政府の長崎総監府に広瀬井手工事の助けを求めました。総監府は、松方正義日田県知事に調査させ国に事業としました。

松方は、この調査で一郎平の高い技術力を知り井手完成後、内務省の技師として採用しました。明治9年、政府から安積疎水(福島県)の調査を命じられました。一郎平らの報告により、安積疎水は政府の重要事業となり、松方は指導者として、一郎平は安積疎水の最高技術者としてかかわりました。

この事業の成功により一郎平は、那須疎水(栃木県)琵琶湖疎水(京都府)を手がけ「日本三大疎水の父」と呼ばれ、松方は指導者として認められ大蔵大臣、内閣総理大臣として活躍し、近代日本の礎を築きました。

エピソード

V

地元に全て託して上京

一郎平の人生哲学のひとつに「財を天に積み、業を地に残す」ということばがあります。

明治3年、国の事業となった広瀬井手は出来上がりましたが、時間をかけすぎたために壊れた所も多く補修工事をしなければなりませんでした。国は補修工事にお金を出さなかつたため、一郎平は土地や家、日用品まで売り払ってその工事を行ないました。完成後、一郎平は井手の権利や管理は地元に任せ、妻子を残して東京へ行きました。貧しい暮らしをしていた妻子を見かねた近所の人たちはお金を出し合い、一郎平が東京に呼ぶまで妻と5人の子どもを抱えた一家の生活を助けたのでした。

一郎平と三大疎水

広瀬井手が完成した後、明治8年政府高官となっていた松方正義の招きで上京すると、政府(内務省)の土木部門ではたらくことになりました。そして、安積(福島県)・那須(栃木県)の両疎水事業では政府側技師の指導者として調査から施行まで行ない、琵琶湖疎水(京都府)でも実地踏査と基本設計を示すなど、日本の三大疎水事業に大きな足跡を残しています。

*疎水(疏水)…農業かんがい・給水・発電などのため、土地を切り開いて作った水路

あさか 安積疎水

安積疎水は、猪苗代湖から取水し、福島県の郡山市などに飲用・かんがい用水を供給している疎水です。明治15年に開通し、それまで水利が悪かった広大な安積原野を一大穀倉地帯に一変させました。約60kmにおよぶ幹線が着工後わずか3年で完成していることからも、広瀬井手開削で培った一郎平の技術が、当時いかに優れていたかを知ることができます。一郎平は、政府の命を受け、東北の開墾地調査を行った段階から安積と関わり、以後、測量、設計、工事監督に直接従事しました。完成後も疎水掛長として現地にとどまり、現在までの安積疎水の基礎を作り上げました。



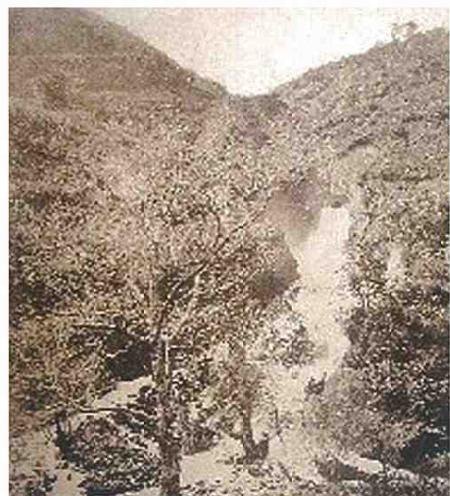
安積疎水取水口（提供：安積疏水土地改良区）



晩秋の磐梯山と猪苗代湖（提供：(社)猪苗代湖観光協会）

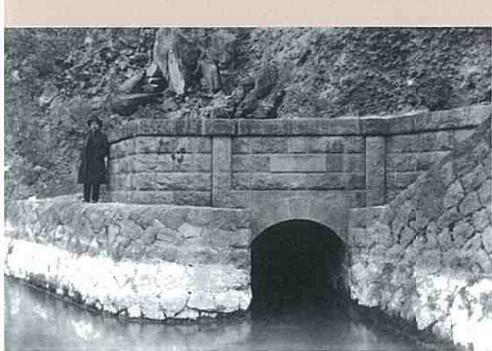


安積疎水・十六門橋（提供：安積疏水土地改良区）



明治14年に貫通した隧道
(提供：安積疏水土地改良区)

那須疎水



明治18年に最初につくられた那須疎水取水口
(提供: 那須野ヶ原博物館)



水の無い蛇尾川 (提供: 水土里ネット那須野ヶ原)

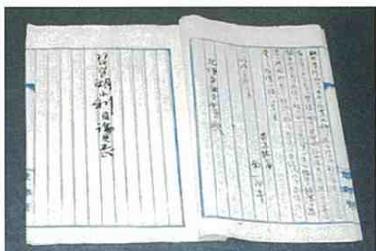
那須疎水は、栃木県の那須野ヶ原に明治18年に開削されました。当時の那須野ヶ原は、4万ヘクタールにもおよぶ平野でありながら、保水性が極めて悪い扇状地であったため、山からの水がふもとで吸い込まれ平野の中央を流れる蛇尾川はふだんから水はほとんど流れていない状態だったため、かんがい用水どころか飲用水にも事欠く状態でした。そこで、内務省は、広瀬井手を手がけた一郎平らを起用し、国営事業として開削に取り組むことにしました。

一郎平は、総監督として、指揮にあたり、約16kmにおよぶ本幹水路をわずか5ヶ月で完成させ、那須野ヶ原の今日の発展の基礎を築きました。那須疎水の蛇尾川サイホン、めがね橋、隧道などには、一郎平が広瀬井手の開削で培った技術や工法が活かされています。



那須疎水 (提供: 水土里ネット那須野ヶ原)

琵琶湖疎水

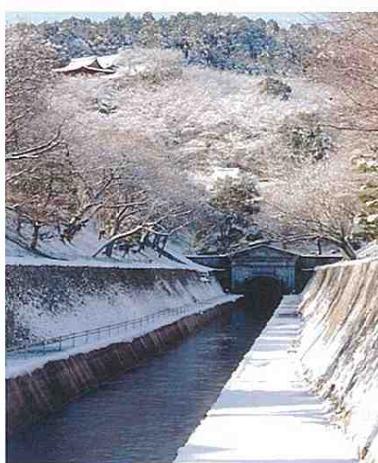


「琵琶湖水利意見書」及び「水利目論見表」
(琵琶湖疏水記念館蔵)

琵琶湖疎水は、明治維新による東京遷都により、衰退していく京都の産業振興を図ろうと計画された事業でした。一郎平は、京都府の依頼により明治15年に現地に赴いて、琵琶湖からどのように水を引いたら良いか、実際に通水を始めると琵琶湖の水位がどの位下がるなどを調査して、「琵琶湖水利意見書」「水利目論見表」にまとめました。

この調査をもとに工事が始まったのです。工事には宇佐からも職人さんが加わっていたことが、事故でなくなった人の名簿で知ることができます。

京都南禅寺の前にある琵琶湖疏水記念館には、「琵琶湖水利意見書」などが展示され、ビデオでも一郎平の業績紹介を見るることができます。



琵琶湖疎水 (提供: 京都市上下水道局)



琵琶湖疎水 (提供: 京都市上下水道局)



琵琶湖疏水記念館 (提供: 京都市上下水道局)

三大疎水以後の南一郎平

十和田と南一郎平

青森県十和田市は、安政26年（1859年）に新渡戸稻造の祖父・傳、父・十次郎、兄・七郎によって、奥入瀬溪流から水を引いて開かれました。明治19年（1886年）に内務省を退官した一郎平は、新渡戸七郎らと共に「現業社」を興し、箱根、横須賀、信越、岩手、青森などで鉄道敷設工事などに携わりました。

現業社



新渡戸七郎
(提供：十和田市立新渡戸記念館)

なん しょう 南尚神社と顕彰碑

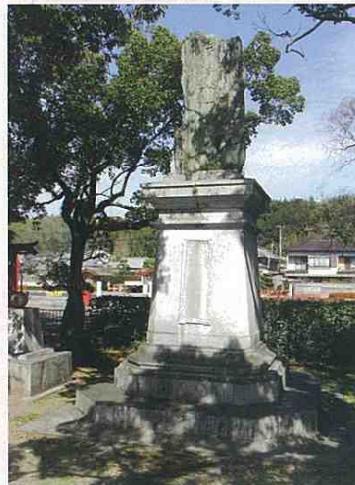
宇佐市高森にある大分県立歴史博物館の東にある小さな神社が南一郎平(のちに「尚」に改名)が祭られている南尚神社です。

石造りの社の碑文には、元号と西暦が並んで刻まれています。神社に西暦を刻むことは長老たちの激しい抵抗があったと言われています。しかし、「宝曆元年起工、明治三年通水式」だけでは何年かかって完成したのか分かりません。そこで、「宝曆元年(1751)起工スルモ三回挫折 元治元年(1864)南翁奮起ノ末明治三年(1870)五月通水式ヲ行ナウニ至ル」と120年余の辛苦により水路が出来たことが細かく記されています。

広瀬井手完成後、水利組合は南一郎平に毎年精米一俵と30円を送ろうとしましたが一郎平は「村人が豊かになって礼節を知ればいい」といって受け取らなかったといいます。

そこで感謝の気持ちを表し、大正十二年六月一郎平の銅像を宇佐神宮神苑の隣接地に建て遺徳を偲ぶことにしました。その後神苑拡張のため銅像を移転することとなりましたが第二次世界大戦中に消滅してしまいました。

この銅像の礎石は南尚神社内の「改良竣工記念碑」の礎石となり残っています。その後広瀬井手水利組合に関係する人々の寄付により、昭和二十八年九月二十三日に宇佐神宮大鳥居前に顕彰碑を建立し現在に至っています。



顕彰碑



改良竣工記念碑

